

ドイツ留学印象記

箕浦恵了

西ドイツのハイデルベルク大学のK・レーヴィット教授から同大学の哲学科セミナルへ受け容れて下さる旨の手紙をいただき、神戸港を発ったのは一九六四年の三月であった。以来、その年の夏学期（五月にはじまる）からおよそ二ケ年にわたって同大学で私は哲学と古典文献学とを学んだ。本稿はその際の私の狭い見聞と浅い体験とに基づく印象記である。これはドイツ哲学界の現況、或はその動向についての報告という如き広い展望をもったものではないことを予めおことわりしておきたい。

私はハイデルベルクで若い友人達や下宿の家庭に親しみ、それらの人々の好意を受け、そういう点では私は全く恵まれた外国生活を体験することができたのである。だが他方私は言葉の困難を最後まで克服できなかった。私の外国生活がなかなか学問をするところまで成熟しないもどかしさを私は留学生生活の最後まで、否、時が経つほど一層強く感じたものであった。私の留学はハイデルベルクで始まりハイデルベルクで終わった。テュー

ビンゲンにはO・F・ボルノウ教授の如き立派な学者が居られることを聴き知ってはいたが、限られた二ケ年間に私は主としてハイデルベルクのガーダマ教授の言葉を聴くことに費した。

ハイデルベルク大学では、私はハンス・ゲオルク・ガーダマ教授 (Prof. Hans-Georg Gadamer) とカル・レーヴィット教授 (Prof. Karl Löwith) との許で哲学を主専攻学科 (Hauptfach) として学び、傍ら古典文献学を副専攻学科 (Nebenfach) に選んで、フランツ・ディールマイヤー教授 (Prof. Franz Dirlmeier)、ウーヴォ・ヘルシャー教授 (Prof. Uvo Hölscher) 及び私講師グスタフ・グロスマン博士 (Dr. Gustav Grossmann) の演習や講義に出席させていただいた。総じて、ドイツの大学の哲学部（日本流に言えば文学部）の学生は主専攻学科の外に副専攻学科をも同時に学ぶのが普通である。ガーダマ、レーヴィット両先生の許で哲学を学びながら、また他方ではホメロス

を読み、ギリシア悲劇についての講義を聴講出来たのを私は大変幸福なことであると思つた。滞独中、私が交わり得た学友達のなかにはドイツ文学と古典文献学とを、あるいはドイツ文学と哲学とを、あるいは哲学と神学とを主、副専攻学科として学んでいる人々があつた。ドイツの学生達は主、副専攻学科を選んでそれらのゼミナルを訪れ、そこで夫々の学科について厳しい訓練を受けながら、広い展望と深い洞察とを得てゆくのである。主専攻、副専攻というけれども、ひとたびゼミナルに出席すれば、主専攻の学生も副専攻の学生も同等に扱われるのである。ゼミナルに出席する学生の活発なこと、教授のきびしさは話に聞いていた以上であつた。学生には完璧な予習が要求されるのは勿論のことである。

ハイデルベルク大学の哲学研究室へレーヴィット先生をお訪ねしたのは一九六四年五月の初めであつた。ヤスパースやツェラー、それにラスクなどの写真をかかげた哲学研究室の奥に先生の個室があつた。そのとき先生は眼鏡をはずして部屋に立つて居られ、私の挨拶が終ると先生は「船旅は静かでしたか」「下宿はどうしましたか」などと訊ねて下さつた。訪問前から少しかたくなつていた私は、先生のこのお言葉を聴いて、ほとと緊張のほぐれる思いがした。このときレーヴィット先生はすでに退任しておられ、夏学期には講義をされずにその期間をスイスのカロナで過されること、だが冬学期にはハイデルベルク

へ帰つて講義をされることを先生はお話しになり、プラトンを学びたいという私に、ガードマ先生の許で勉強をするようにと助言して下さいました。このとき私は、前もって用意しておいた聴講時間表を見ていただいて先生の御意見をうかがうと、先生はその中の van der Meulen 教授（オランダ人）の講義はドイツ語が良くないから外国人である私には適當ではないでしょうなどと言つて下さつた。その日レーヴィット先生の机上には、翌日、大学で行なわれるはずのマクス・ウェーバー生誕百年祭の記念講演の原稿があつた。講演の行なわれる夕刻私は Neue Universität（新校舎）の講堂で多くの聴衆の中に入ってレーヴィット先生の講演を聴いた。ドイツへ来てまだ数日にしかならない私には勿論先生の講演を理解する力はなかつた。だが翌日の同地の新聞は先生この講演の要旨を載せ、評言を加えていた。人口十三万にすぎない小都市の新聞の独自の見識を私は興味をもつて読み、大学都市の知的な空気を始めて呼吸しえたように思つたのだつた。レーヴィット先生のこの講演は後に *Die Entzueberung der Welt durch Wissenschaft, Zu Max Webers 100. Geburtstag (Merkur, 196, Juni 1964)* として発表された。

講演を終えられた先生は間もなくスイスへ発つてしまわれ、私は先生の御指示に従つて、ガードマ先生のゼミナル（テキストはデカルトの『省察』であつた）と近世哲学史の講義（主にクザヌスについての）に出席して勉強を始め、また不十分にし

か出来ないドイツ語の練習にも力を注がなければならなかった。そうしてその学期中私はレーヴィット先生とお別れしたまま、端書さえお書きするのを怠ってしまった。だが次の冬学期にハイデルベルクへ帰って来られた先生は、早速、新しい論文 *Hegels Aufhebung der christlichen Religion (Hegel-Studien, Heidelberg Hegel-Page 1962)* の抜刷を下取りたり、夏学期に私がどんな勉強をしたかを訊ねて下さったりした。その冬学期にはレーヴィット先生はハイデルベルク大学で「哲学と宗教」と題する講義をされた。その講義は『知識・信仰・懷疑』（一九五六）という先生の書物の第一章「知識と信仰」及び第二章「懷疑と信仰」を骨格にし、例えばプラトンの『エウテュブロン』等からの引用によって新しく加筆された内容のものであった。教室へは多数の学生が聴講に集まり、遅く行けばもう席のないことさえあった。先生の講義が終って教室を出るとき、学生の一人が「何と素晴らしいアウスアインアンダーゼツツング（対論）なんだらう」と感嘆したのを聞いたこともあった。先生の講義は峻厳な鋭い批判精神に満ちあふれ、先生の哲学的情熱が聴く者の胸に生々と伝えられる格調高いものであった。平常は先生はただ物静かに、手短かに語られる。だが、講義のときと同じように、そういう物静かなさりげない言葉の中にさえ私は先生の確固不動のなにかがあるのを感じた。それは一体何であろうか。私は、先生の講義から帰る道すがら、或は先生を訪問した後など、よくそれを自問したのであ

った。

ハイデルベルクの近郊に住み、神学及び宗教哲学に関する著作活動を続けているフィッシャー・バルコニル氏と私は近づきになり、私は氏をドッセンハイムの自宅にしばしば訪問した。或る談話のとき、彼はレーヴィット先生のことについて、「レーヴィット教授の哲学には苦悩がある」と言った。この一言はレーヴィット先生についての先の疑問に光を当てるように私には思われたのである。どういう苦悩が先生の哲学の背後にあるのかを私はここで正しく言うことはできない。だがそれを問うとき、ナチスの圧迫を避けて日本へ、更にアメリカへと移住し戦後ようやくドイツへ帰えられた先生の姿を思い浮かべるのは間違いであろうか。哲学とキリスト教神学との関係を歴史的に吟味してその両者の峻別の重要性を強調される先生に私は「哲学を生きる人」を感じるのである。今年六月、先生からいただいた私信によれば、先生はこの冬学期には再びハイデルベルク大学にもどり「神、世界、人間」と題して講義をされることである。

一九三六年先生は東北大学へ哲学とドイツ文学とを講ずるため来日されたが、先生の来日にあたっては当時マールブルクにいたルードルフ・オットーの勧めがあったのだそうである。以来、先生が日本へ寄せられる関心は高い。先生が在日中の経験に言及された論文 *Unzulängliche Bemerkungen zum Unterschied von Orient und Okzident* はガーター教授の

還暦記念論文集 *Die Gegenwart der Griechen im neueren Denken*, Tübingen 1960 への寄稿である。

一九六五年二月十一日はガーダマ教授の六十五回目の誕生日であった。哲学科の学生が中心になって、その夕刻われわれ学生は先生の自宅まで松明行列をして先生の誕生日を祝った。冷え込みの厳しい天候にもかかわらず多くの学生がこの祝賀の行進に参加した。そのとき先生は学生の祝辞に答えて、次のように語られたのであった。「私は専門家を育成することが私の課題であるとは思って居りません。私は自分の学生達の精神の深化を手助けしたいと思っているにすぎないのです。また思考の訓育や自己を明らかにしてゆく能力に関して幾分のお手伝いをしたいと思っただけなのです」と。そうして先生は「あなたが私の許で学ぶ限りは、喜んで私は教えます」(“Ich lehre mindestens ebenso gern, wie Sie bei mir lernen.”)と言葉を結ばれたのであった。

私がガーダマ先生を始めて研究室にお訪ねしたのは最初の夏学期の演習(デカルトについての)がもう始まってからであった。私が先生にプラトンを学びたい旨を申し上げると、先生は「プラトン研究には、プラトンの原典をよく読んで、ギリシア語で考える訓練をしなければなりませんね」、「例えばシュライエルマッヘルの独訳、あれは非常に立派なものだけれども、プラトンを知るためにはどうしもてギリシア語で読まなければなら

ないのです」と言われた。そうして先生は私にこれまでプラトンをどんな風に学んで来たかを訊ねられた。その後、先生は私にベルク街の自宅へ来るようにと招いて下さったので、約束の時間にお訪ねすると、先生は問はず語りに先生の若い頃からの研究の過程を話して下さったり、当座に私が一読すべき書物を示して下さったりした。ダーガマ先生はマールブルクのパウ・ナートルプの許で一九二二年に学位を取られ、ニコライ・ハルトマン及びフッサール等の許で学ばれた後、当時まだ若かったハイデッガーの許で、彼の指導のもとに大学教授資格を得られたとのことである。その Habilitationsschrift (教授資格取得論文)は *Platons dialektische Ethik*, Leipzig 1929 (現在絶版)であった。ガーダマ先生が私に是非とも読むようにと言われたのは Gerhard Krüger の *Einsicht und Leidenschaft*, Frankfurt 1939/63 であり、また私のプラトン『ハイムン』への関心のためにアウグスチヌスの *De immortalitate animae* をも一読するとよいと教えて下さった。

先生は一九六〇年に『真理と方法』(Wahrheit und Methode, *Grundzüge einer philosophischen Hermeneutik*, Tübingen 1960) という解釈学的研究の成果を発表され、私が滞在中一九六五年には同書への若干の批評、質疑を顧慮して、「第二版への序」と「解釈学と歴史主義」という一章とが新たに書き加えられて、第二版が出版された。この書物は私の知る限りでは非常な評判であった。一九六五年の謝肉祭の頃、哲学専攻の学生

が催した舞踏の夕は先生のこの書物 *Wahrheit und Methode* をもじつて、*Nartheit und Methode* (阿呆と方法)と名づけられた程である。『真理と方法』は第二次大戦後のドイツの哲学界の最も大きな業績の一つである、とも私は聴いた。これまでもこの書物に関しては、部分的な批評や論及はあったが、この著作を全体として取扱った批評や論及はドイツ国内に於いてさえ、今日まだ現われていないようである。

ガーダマ先生は講義や演習において、しばしば方法的な問題に触れられた。例えば一九六五年冬学期に於ける先生の講義は「ソクラテスとプラトン」という題であったが、講義の際、先生は多くの時間をさいて、ドイツに於けるプラトン研究の伝承 (*Überlieferungen*) に由来するさまざまの偏見に言及され、正しいプラトン像を得るためにプラトン研究における偏見を取り除く手続きの必要性を強調されたのであった。ガーダマ先生が挙げられる偏見とは次の四つである。(一)体系的偏見 (*Systematische Vorurteile*)、(二)発生的偏見 (*genetische Vorurteile*)、(三)美的偏見 (*ästhetische Vorurteile*)、(四)政治的偏見 (*politische Vorurteile*)。体系的偏見とは或る特定の哲学体系からプラトンを解釈するとき生ずる偏見である。例えばヘーゲルのプラトン観は彼のイデアリスムスに基いたものである。ポニーッツ、ニコライ・ハルトマン、パウル・ナートルのプラトン解釈もそれぞれ体系的偏見に陥っている。また第二の発生的偏見とは、さまざまなプラトンの著作をいかに順序

だて連関づけるかによって生ずる偏見である。この偏見は一九世紀の始めの歴史意識の生起と共にプラトン研究に生じて来たものである。第三の偏見とは、一九世紀の詩人哲学者ニーチエによって代表されるプラトン観である。学問的正確よりも美的考察を重んずることから生ずる偏見である。最後に政治的偏見とはプラトンと政治との関係の認識についての誤解である。

この偏見に陥らないためにはプラトンの第七書簡をよく読む必要があることを先生は強調された。こういう風にドイツにおけるプラトン研究の伝承を顧みながら、ガーダマ先生は私たち学生に、「或る作品がどんな目的を以て書かれたか、またそれをどんな方法で読むことが出来るか」ということをよく考えてみなければならぬと強調して教えられたのである。これに関して想い起こされるのはK・ヒルデブランドがかって『プラトン』(一九五九、第二版)の「第二版のための後語」に於て、現代ドイツのプラトン研究に言及しつつガーダマ先生に触れていることである。ヒルデブランドは先生の *Platons Staat und Erziehung* (in "Das neue Bild der Antike" 1940) を取り挙げて、ガーダマ先生がその中でプラトンの政治的伝記をプラトンの作品と哲学との認識に役立てることがプラトン研究にとってどんなに実り豊かであったかということの承認から始め、『第七書簡』の伝記的スケッチをプラトン解釈の基礎として鋭い洞察を展開して居られることを称賛しているのである。「ガーダマはプラトンを偉大なる政治的教育者と見なすのであ

る。なぜならばただ正義への教育に基づいてのみ国家は健全に建設されるからである。正しい国家を実際に創設しようという情熱からプラトンの著作を理解するということは、私にはだからとりわけ重要であると思われるのである。我々のテーマに就いて決定的なものとは、即ち、学者達は往々にして実証主義的な出来事のみ高く評価して、運動を軽視しているのに、ガーマは『国家』を精神の、哲学する運動と見なしていることである』(S. 39)と。ガーマ先生は、前記の「ソクラテスとプラトン」と題する講義のなかで更にソクラテス問題に触れ、新約聖書研究の方法を用いてプラトン研究を行なっているH・クーンの『ソクラテス』は示唆に富んだ書物であると言ってクーンのこの書物の内容を紹介されたり、特に、エルヴィン・ヴォルフ(Erwin Wolff)の *Platos Apologie*, Berlin 1925 という研究論文を、申分のない研究だと言って、紹介されたりした。このこの講義に於ても先生は、立派な研究を学生に紹介してプラトン研究の現状を知らしめるようにされたが、講義の根本はプラトンのテキストをゆっくり読まれて、学生をその味読と、それについての思索とに導こうとされる点にあった。プラトンの『弁明』を読みながら、ソクラテスがデルポイの神託の意味を問題にし、反証をあげるためひとを訪ねる箇所に来ると、先生は「ギリシア人は何と注目すべき人間 (merkwürdige Menschen) なのでしょう。これがギリシア人の敬虔の真の姿なのです」。「ギリシア宗教の真の姿はここにあり」と、テキ

ストを置いて語られた。先生が毎学期木曜日と金曜日との午後講義をされた *Ale Universität* (旧校舍) の講堂は天井に神学、法学、哲学、医学の女神の姿を描いた古めかしい建物である。このアウラで先生は、私の滞在中、「近世哲学史」(クザヌスを中心とした)を、「美学」を、「ヘーゲルからハイデッガーへ」と題する講義を、そして「ソクラテスとプラトン」を講義されたのである。私の関心はそれぞれの講義の対象に向って目ざまされ、誘われた。先生の講義を聴くことがなかったら、私はモーゼル河畔の町ベルンカステル・クルースヘクザヌスの生家を訪れ、クザヌス文庫を訪れることをしなかつたかも知れない。未知であったクザヌスへと関心呼びさまされたことは、旅行の途上眺めたモーゼル河畔の美しい雪景色や、クザヌス文庫で受けた管理者ホマー博士の親切なおもてなしと共に、留学中の美しい思い出となった。

私が出席したガーマ先生の演習のなかで最も緊張した雰囲気がかもし出されたのは、プラトンの『ソフィステース』についての演習よりも、またヘーゲルの『精神現象学』についてのそれよりも、むしろ先生が古典文献学のU・ヘルンジャー教授と共同で開かれた一九六五年度冬学期の、エムペドクレスをテーマとする演習であったように思う。この共同研究の経過をいまは述べる事が出来ないが、ディールスの『断片集』の他に、アリストテレスの『形而上学』、『自然学』を読ませられ、特にまたシンプリキオスの、『自然学』への註釈書の重要性をガー

ダマ先生に教えられ、それをも参照しなければならなくなつて、その大変な作業に困惑したものであった。

その他、先生を研究室に訪れて教えていただいた書物はかなりあるが、私はここでそれらをいちいち挙げるのを省いて、私の今後の研究の中にとり入れてゆきたいと思う。研究室へお訪ねすると、先生はいつもよく会つて下さつて、私のつまらない質問にもいいねいに答えて下さつた。『バイドン』を読むことに関心のある私は、『バイドン』の中の魂不死の四つの証明の展開が、証明の論理の発展と共に魂の不死の意味の深化、展開になっていることに注目して、四つの証明の論理は魂の不死の意味を見出して来るためのものではないかと考えながら、或るときハイデルベルクの下宿でプラトンの『バイドロス』を讀んで、*ἡ ψυχὴ οὐ φέρεται ἄνω κατανόηται ἀπὲρ οὐρανόθεν ἐπὶ τὴν γῆν φέρεται* (270c) (「では魂の自然をば、全体の自然をはなれて、語るに足る程に認識することが可能であると君は思ふか」) という箇所があつたので、これは『バイドン』を理解するための大切な前提になる言葉ではないかと思ひ、ガードマ先生にお訊ねしたところ、この「全体」(τὸ ὅλον) という語は自然的世界を指すかどうかは問題であつて、そう簡単には言えないことですよ、といつてこの箇所に関する種々の説を教えて下さつた。このとき先生は、『バイドン』のような作品はキリスト教の伝統の中いる者によりも、むしろあなたがた日本人の方が正しく理解し得るのではありませ

んか、と言われた。

ディールマイヤー教授の演習、ホメロス『オデッセイア』は初級ゼミナルであつたが、出席してみても、ドイツ人学生のギリシア語を読む力に驚いたことであつた。演習の第一時間目に先生は「ホメロスを原文で一度も読んだことのない人は？」と訊ねられたので、私が臆せず手を挙げると、そういう学生は約二十名の中、私ただ一人であつた。出席者のうち外国人は二名であつたが、他の一名というのはギリシア人の女子学生であつた。先生の演習の進め方は、テキスト全部を読むのではなく、先生があらかじめ指定された箇所を予習してきて、演習の時間にはその箇所の音読と訳読とが課せられた。また、教室で讀まない箇所については、物語の理路をまとめて書かされ、『オデッセイア』を全体として把握できるように指導され、私には大変有益な演習であつた。

いよいよハイデルベルクを去る数日前、私はカールスルーエの美術館を再び訪れた。アンゼラム・フイエルバハの絵画「プラトンの酒宴」を観るためであつた。その絵画はドイツに來たばかりの私をいたく感動させ、異国での哲学研究、古典研究へと私を励ましてくれたものであつた。私はこの絵画に別れを告げたのである。